

# ブライアン・フリール『ルナサの踊り』論 ——共生・崩壊・継承

及 川 和 夫

## はじめに

『ルナサの踊り』(*Dancing at Lughnasa*)は1990年4月24日にダブリンのアベイ座で初演されて以来、ブライアン・フリールの劇作品の中でも最も知られる作品となった。各国で上演されただけでなく、1998年にはアカデミー賞女優メル・ストリープ(Meryl Streep)を長女ケイトに配して映画化され、さらに多くの人たちに知られるようになった。しかもこの作品はフリール作品の中では例外的に自伝性が最も強い作品となっている。本論ではこの作品はメッセージと、その提示法を分析するだけでなく、なぜこの時期にフリールが自伝的テーマに取り組んだかも考察していきたい。

## I. 自伝性と虚構

この作品の人気は絶大なものがある。スコット・ボルトウッド(Scott Boltwood)によれば、それまでフリール最大の人気作であった『トランスレイションズ』(*Translations*)が1980年の初演以後の20年間に17か国で60回上演されたのに対して、『ルナサの踊り』は1990年から2000年の10年間に30か国で69回上演されたという。<sup>1</sup> まさに圧倒的な人気である。これは劇の舞台がアイルランドの最北西部ドニゴールの寒村、時期が1936年の8月の始めと極めて限定されていることを考えると驚異的である。

しかもこの作品ははじめに述べたようにフリール作品の中では例外的に自伝性が高くなっている。作品の自伝性に関してはアンソニー・ローチ(Anthony Roche)が詳しく論じている。ローチによれば、この作品に登場するマンディ家の5人姉妹は、フリールの母親の実家である、ドニゴール近郊のグレンティズ(Glenties)にあったマクルーン(MacLoone)家の母親を含む5人姉妹をモデルにしているという。ローチは一家の長男、バーナード・ジョウゼフ・マクルーン(Bernard Joseph MacLoone)神父の1950年7月10日の『デリー・ジャーナル』紙(*The Derry Journal*)、7月15日の『アルスター・ヘラルド』紙(*The Ulster Herald*)に載った忌中記事を紹介している。新聞記事によれば葬儀の参列者は、元国民学校教師でグレンティズ在住のミス・カサリーン・マクルーン、元小学校教師で同じくグレンティズ在住のミス・マーガレット・マクルーン、デリー在住でフリールの母親であるパトリック・フリール夫人のマリー、それにロンドン在住のミス・ローズとミス・アグネスとなっている。<sup>2</sup> フリールの母親以外はケイト、マギー、アグネス、ローズと実名で登場している。また新

聞によれば長男バーナードはアフリカ・ウガンダのリャンガのらい病患者施設で布教活動をしていたが、1946年にマラリアのために帰国したとあり、劇中に登場する長男、ジャック神父の経歴と一致する。

しかしいくつかの相違点もある。劇中でジャック神父は1936年夏に帰国して間も亡くなるということになっているが、バーナード神父は1950年に65歳で亡くなっている、しかも帰国の時期には10年の相違がある。また長女ケイトが学校教師というのは劇でも同じだが、劇では専業主婦のように一手に家事を統括している次女マギーも小学校教師をしていた。なによりも語り手で登場人物でもあるマイケルは五女クリスの私生児という設定になっているが、フリールの母親の名前はメリーであり、正式に結婚している。また新聞記事の記述では三女となっている。またアグネスとローズは劇では最後のほうで密かに家出して、行方不明のままロンドンで窮乏生活の末に亡くなるということになっているが、バーナードの葬儀に参列したということは、連絡は取れていたことになる。しかしローチによれば、フリールが劇作家仲間のトマス・キルロイとロンドンのウォータルー・ブリッジを歩いているとき、アイルランド人路上生活者たちの声が聞こえて来て、フリールはキルロイに「自分の2人の叔母があのような形で最期を迎えたのではないかと思う」と述べたというエピソードを紹介している。<sup>3</sup> 真相は不明だが、アグネスとローズとは葬儀参列後連絡が取れなくなり、劇中のような最期を迎えた可能性はある。このようにこの作品はフリールの自伝的要素に基づきながらも、そこに巧みに虚構性を織り込んだ作品ということになる。しかしモデルとした叔母たちへは最大限の敬意を払おうという姿勢は、「あのグレンティズの気丈な5人の女たちを偲んで」(In memory of those brave Glenties women) という献辞から窺える。

## Ⅱ. 回想という構造

この作品の形式上の最大の特徴は語りの構造にある。先に述べたようにこの作品の舞台は1936年8月である。そこには7歳の子供であるマイケルが登場する。その一方でこの作品の語り手として大人になったマイケルが登場する。すなわち大人になったマイケルが自分の子供時代を回想するという形になっている。これと似たような構造になっているのはテネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』(The Glass Menagerie) である。この類似は偶然ではないだろう。クリストファー・マレイによれば、この作品が1990年4月にアベイ座で初演されていた時、同じくダブリン市内のピーコック座で『ガラスの動物園』が上演されていたという。しかもその演出を手掛けたのはフリールの娘のジュディであった。<sup>4</sup> また主人公が最後に家を出るという結末も似ている。従ってこの作品も『ガラスの動物園』と同じような「回想の劇」(memory play) である。語り手の回想が舞台と観客の間に介在することによって、演劇という形式にもかかわらず、語り手の回想という抒情性が作品全体を包んでいる。その効果は劇の最初と最後に登場人物たちが静止したタブローを配するという演出によって強化されている。作品全体が語り手の記憶の中にある一幅の絵として完結するように仕組まれている。

1936年8月の時点で7歳であるマイケルは、逆算すると1929年の生まれということになり、これ

は作者フリールと同年ということになる。つまりマイケルはフリールの分身とまでは言わなくとも、大きく彼自身をモデルにしている部分が多いだろう。そしてこの時代設定は自伝性だけでなく、実に周到な計算のもとに選択されている。1922年にイギリス＝アイルランド条約で正式にアイルランド自由国が成立して10数年後。自由国発足当時の自由国政府はアーサー・グリフィスやウィリアム・コスグレイヴ、マイケル・コリンズらの条約賛成派が主流となった。条約反対のエイモン・デヴァレラが率いる共和派は、フォー・コートに立て籠もって内戦が勃発した。内戦終結後のデヴァレラはフィアンナ・フォイル党を結成して国会に復帰した。当初は野党に甘んじていたフィアンナ・フォイル党だが、1931年に党機関紙『アイリッシュ・プレス』紙（*The Irish Press*）を発刊して政府批判を強め、1932年の総選挙で勝利して、デヴァレラは初の政権の座についた。

これによってアイルランド政治、社会は一層内向きになったと言っていいだろう。世界大不況のさなかに、デヴァレラはイギリスへの土地補償金の支払いを拒否し、イギリスと関税をかけあう経済戦争に突入した。カトリック教会の影響力はさらに増した。それ以前にも1929年の悪名高い出版検閲法などがあったが、この作品との関係で言えば、1935年に公共ダンス・ホール法（*Public Dance Halls Act*）が導入されている。これは野外ダンスを禁じ、ダンスはライセンスを受けたダンス・ホールに限定された。これによりこの作品のタイトルにあるルナサの踊りは厳密には違法となる。この法律の背後に、ルナサの踊りのような異教に起源がある祝祭での、しばしば飲酒を伴う、激しい肉体活動を忌み嫌うカトリック教会の強い意向があるのは明白である。

さらにこれらの総決算となるのが1937年に制定されたアイルランド新憲法だ。この憲法により、大統領制が導入され、アイルランドの中心的な宗教としてカトリック教会が明確に規定された。デヴァレラが目指す、アイルランド自由国からアイルランド共和国への移行の決定的な一歩が踏み出された。R・F・フォスターはこの憲法について次のように言っている―「これ（＝1937年新憲法）は国民主権の言語を体現し、強い神政政治の含意が現れている。国民に選ばれた大統領が国民の権利の守護者として登場し、大統領は国民の意志をまず国民投票によって確かめねばならないと考えた場合、法案に署名を拒否する権限を持っている」。<sup>5</sup> この憲法によってダグラス・ハイド初代アイルランド大統領が誕生し、第2代大統領にはデヴァレラ自身が就任する。この作品は公共ダンス・ホール法と新憲法の間に絶妙に挟まれた1936年に設定されている。

### Ⅲ. 太陽神とラジオ

7歳とされるマイケルだけでなく、家族は全員年齢を特定されている。長女で一家の主要な働き手である教師のケイトは40歳、次女で家事を全面的に統括するおどけ者のマギーは38歳、物静かだが意志の強い三女アグネスは35歳。知恵遅れで天真爛漫な四女ローズは32歳。アグネスとローズは手袋を手織りする内職をしている。末っ子の五女で、マイケルの母親であるクリスは26歳。アフリカのウガンダから帰国したばかりの長男ジャックは53歳。後に登場する、行商をしているマイケルの父親であるウェールズ人、ゲリー・エヴァンズは33歳である。劇は先に述べたように自宅の庭にい

る一家のタブローから始まる。一家には照明は当たらず、ただひとり左手で照明を浴びた大人になった語り手のマイケルが話し始める。

マイケル：あの1936年の夏を振り返ると、さまざまな思い出が湧き上がってくる。あの年の夏に僕たちは最初のラジオの装置を買った。まあ装置のようなものさ。そして僕らはそれに夢中になってしまった。そのラジオが届いたのがまさに8月が始まるという時だったので、一家のおどけ者だったマギーおばさんがこのラジオに名前を付けようと言いつ出した。おばさんはケルトの収穫の神様にちなんでルーという名前にしたいと言った。なぜなら昔8月1日は、異教の神、ルーのお祭り、ルナサだったからさ。その後の収穫の何日間か、何週間かはルナサのお祭りと呼ばれていた。しかし国民学校の先生で、とてもきちんとした人だったケイトおばさんは、生命のないものに名前のようなものを付けるのは罪深いことだ、ましてや異教の神様の名前なんてと言った。それで僕たちはその装置の商標にあった名前であつたマルコーニとラジオを呼んでいた。<sup>6</sup>

早くも家庭内の力関係が窺える。「とてもきちんとした」(very proper)と形容される長女ケイトは教師として一家の主な収入を稼ぎだし、家長として振る舞っている。それに対して次女マギーは「おどけ者」(joker)でラジオに名前を付けようとする遊び心がある。しかしその遊び心もケイトの正論によって即座に否定される。どうやらケイトは女性でありながら父親代わりの家長を演じることによって、実際の父親以上に厳格になっているような嫌いがある。ケイトとマギーは実質的に一家の父親、母親を演ずる役割を負わされている。後でケイトは家事労働の評価を巡って妹たちと口論するが、このやり取りは現代のエリート・サラリーマンと専業主婦の妻の言い争いのように聞こえてくる。

しかも興味深い点は、マギーがラジオにルーという名前を付けようと提案していることだ。ルーは古代ケルトの光の神である。太陽の光の恩恵で育まれた作物の収穫を祝うために、収穫祭のルナサはルーのお祭りとなる。またこのラジオは家の近くの木に取り付けたアンテナから電波を受信して再生する電池式の真空管ラジオである。大きな電流を必要とする真空管が電池で駆動できるのだろうかという疑問に思ったが、調べてみるとこのラジオは実在した。しかしこのラジオは真空管の過熱か、フィラメントの接触不良か、鳴っていると突然切れてしまったり、何かの拍子に突然鳴り出したりする。非常に動作が不安定である。そしてその不安定なラジオが奏でるのは、ジャズ・エイジの1930年代に相応しいジャズ・ソングやアイルランド伝承音楽のダンス曲である。マギーのラジオにルーという名前を付けようという提案は単なる思いつきだろうが、こうして見ると作者フリールがルーとラジオに類似性を喚起しようという意図があつたことを暗示する。変わりやすい天候のアイルランドで時たま差し込んで地上を照らす太陽の光。見えない形で放たれた電波を受けとめて、気まぐれに異国や自国の音楽を間髪的に鳴らすラジオ。フリールはラジオに現代の太陽神ルーを見ているのかもしれない。しかも国の違いはあれ、ジャズにしてもアイルランド伝承音楽にしても、本来ダンス曲である。現代の太陽神ラジオは気まぐれに、人間の生命力の発露である踊りをどこからともなくもたらす。

語り手マイケルが冒頭の語りを終えると、静止したタブロー状態だった登場人物たちが動き出す。ケイトは家から2マイル（3.2キロ）離れたバリベッグの中心部から買い物をして帰ってきたところだった。家族一人一人のために買ってきた商品を並べながら、ケイトは世間話を始める。久しぶりに出かけた町はルナサの踊りの話でもちきりだった。するとアグネスは昔のように姉妹5人で踊りに出かけようと提案する。しかもアグネスは自分が切り詰めて貯めた5ポンドのお金を姉妹全員の踊りに行く費用に充てるとまで言い出す。ケイトはこの突然の提案に驚きながら必死に反対する。いわくマイケルや病身のジャックの世話は誰がするのか等々の問題を指摘する。それと同時にケイトの口調には地元の人々を蔑視する感情が見え隠れする。いわく「私が何年か前に教えた生意気なガキどもと這いまわるのよ（DL 12）」、「あの田舎のクズどもみんなと（DL 12）」。しかしアグネスは納得しない——「私はまだ35歳よ。踊りたいわ（DL 13）。アグネスは普段は物静かな女性だが、その心には激しい情熱を秘めていた。彼女がケイトに依頼した買い物のなかには、看護婦をしながらクマン・ナ・バンや共和派の運動に熱心に参加し、ロマンティックな小説を書いたアニー・M・P・スミスソンの本が含まれていた。35歳という独身女性にとって切羽詰まった年齢のアグネスは、自分の魂を燃え上がらせることをギリギリまで諦めてはいない。この上なく大事な自分の貯金の5ポンドを姉妹のために供出するという寛大極まりない提案の理由がここにある。アグネスは最後の賭けに出ているのだ。しかしこの願いはケイトに強引に断ち切られてしまう。

ケイト：村中の人たちに笑われたいの。私たちの年で、立派な年齢の女が踊るですって。一体みんなどうしたの。ここはジャック神父の家よ。それは絶対忘れちゃ駄目よ。駄目よ、いけないわ、収穫の踊りなんか絶対行かないから。（DL 13）

過度に家長像を内面化しているケイトの最大の原動力は長男ジャックの存在である。ジャックは第一次世界大戦のころにはイギリス軍の従軍聖職者を務め、その後アフリカ、ウガンダのらい病施設で布教活動をしたため、地元紙に記事が載るほどの名声を獲得していた。しかしこれは当時の激動の 아일랜드 情勢では危険な綱渡りのようなものであったと推測される。語り手マイケルの回想では、あるときケイトの祈祷書から軍服姿の颯爽としたジャックの写真が床に滑り落ちたことがあったという。それは1917年に撮られた写真で幼いマイケルに鮮烈な印象を与えた。これはイギリス従軍聖職者時代のものである。しかし続けてマイケルは言う——「しかしケイトおばさんは地元で独立戦争に係わり、ジャックおじさんのイギリス軍での短いキャリアは家ではまったく触れられなくなった」（DL 8）。すなわち当初は名誉であったイギリス軍聖職者の名声は、1916年のイースター蜂起、1918年総選挙でのシン・フェイン党の地滑り的大勝利、独立戦争の勃発で、一転して危険なマイナス・イメージに転じた。しかしその後、ウガンダのらい病施設の宣教師に転じることによって、危うく名声を維持、ないしは増大させることができた。

しかも注目すべき点はケイトが独立戦争に係っていたことだ。彼女が22歳から25歳ごろのこと



だ。彼女がどのような学歴で、いつから教師をしているかは作品中には一切書かれていない。普通に師範学校を終えて教職についた可能性も否定できないが、一家で爪に火を点すようにして切り詰めてジャックに仕送りをしていたマンディ一家にそのような余裕はあっただろうか。アイルランドの初等中等教育を管理していたのはカトリック教会である。若く利発なケイトの大胆な政治的行動を好ましく思ったカトリック教会関係者が彼女を学校教師に抜擢した可能性もこの短い一節は示唆しているように思う。末っ子クリスが私生児マイケルを儲けたことは、この当時のアイルランドの田園地帯では決定的なスキャンダルである。にも拘らずマンディ一家が村八分にされていないことは、ジャックの献身的宣教師としての名声と、ケイトが村の教師であるという権威によって辛うじて相殺されたと見なければならぬ。しかもその力学は非常に危ういバランスの上に成立している。しかし家庭で家長的に振る舞うケイトは学校でも権威的に振る舞ってしまうようで、口論したローズはケイトが学校でみんなに「まぬけ」(the gander, DL 24) と呼ばれていると思わず漏らしてしまう。

#### IV. 風と独楽

一方、7歳のマイケルは一家から距離を取って庭の片隅で凧作りに没頭している。7歳といえば遊び盛りの年頃だが、作品中に彼の友人は一人も登場しない。夏休み真最中とはいえ、これは異様である。しかもマイケルには孤独の影が見える。おどけ者のマギーはそんな甥っ子に謎かけでちょっかいを出してくるが、すべて「降参」で相手にしない。しまいには鼠がいると嘘をついてマギーを撃退する。恐らく私生児であるマイケルには遊んでくれる友達がいらない。アフリカの宣教師ジャック神父とケイト先生の甥っ子であると世間的に認められているとはいえ、建前を離れた家庭内では何を言われているかは分からない。当時のアイルランドの農村地帯では私生児であるという烙印はあまりに重い。いわばマイケルには同年齢の友人という横の、水平の関係が不在である。そのような人間はどこに救いを求めればいいのか。それは縦の、垂直の関係しかあるまい。恐らく孤独に凧を作り続けている少年の無意識の動機の下にはそんな希求があるのではないか。その凧はいずれ空高く舞い上がるだろう。そしてその凧は眼につくかもしれない。まだ見ぬ父親の目に。そして父親は、太陽神ルーのように、またはラジオを鳴らしている電波のように、ある日突然地上に舞い降りるのかもしれない。

マイケルは買い物帰りのケイトに出会う。凧を作るマイケルにケイトは駒と鞭を与える。これは実に著しい対照をなしている。空高く舞い上がろうとしているマイケルに対して、ケイトは駒のように自立し、自らを鞭で叱咤することを求める。しかもプレゼントの後には以下のやり取りが続く。

ケイト：……あなたは何ていうの。

少年：ありがとう。

ケイト：ありがとうございます、ケイトおばさんでしょう。ここに何を持っているか分かる。新しい図書館の本よ。しかも色付きの絵入りよ。寝るときに一緒に読みましょうね。(マイケルの頭の上にキスし、立ち上がる)。(DL 9)

マギーとケイトのマイケルに対する接し方は対照的である。マギーは揶揄いながら謎々をしかけてくるなど、伯母という目上の立場であるという感じはない。むしろいたずら仲間のようなものである。それに対してケイトは保護者としてマイケルを躰けるという態度を崩さない。帰宅したケイトは姉妹にマイケルの風の話をする。その話はおおむね好意的に受け止められる。アグネスはケイトはいつもマイケルには才能があると話していると言い、ケイトは同意し、年のわりには大人だと付け加える。ローズはマイケルがハンサムなので、自分の子供だったらよかったという。マイケルは伯母たちの性格に応じた愛情と好意を寄せられている。ただし母親のクリスは年の割りにとても生意気だと点数が辛い。そんなマイケルは劇中では伯母たちの輪からは常に距離を置き、しばしば急に姿を消し、また不意に現れる。そんな彼の姿はどうやら彼が伯母たちの愛情や好意をいささか重荷に感じているようにも見える。先ほどマイケルには同世代の友人という横の関係がないと指摘したが、家庭内では伯母という斜め上の関係に取り囲まれている。しかも母も含めて全員が独身である。彼女たちは好き好んで独身を通してはいる訳ではない。経済状態や社会の環境が彼女らに結婚を許さないのだ。困難とは知りつつ、彼女たちはそれぞれに胸の中に恋の情熱と願望を秘めている。次にこの点を検証する。

## V. 踊りとディオニュソスのなもの

物静かな三女のアグネスが実は激しい情熱を胸に秘めていることはすでに指摘した。劇中で恋愛関係が最初に明らかになるのは、四女のローズである。妻子持ちの男、ダニー・ブラッドレイがローズにちょっかいを出していることは姉妹の知るところであり、姉妹は全員でダニーはローズが知恵遅れで世間知らずなのに付け込んで悪奴だとローズを諷める。しかし素直なローズは、みんなは恋をしている私に嫉妬しているんだ、ダニーは優しく去年のクリスマスにプレゼントをくれたと言っている私に嫉妬しているんだ、ダニーは優しく去年のクリスマスにプレゼントをくれたと言っているローズは、そんな自分を肯定してくれるダニーに優しさを感じている。これはダニーが妻子持ちなので形から言えば不倫であるが、ローズの素直な気持ちであることも否定できない。

そんなやるかたないローズの感情は長女のケイトに爆発する。今まで見てきたように家長として過度なまでにカトリック教徒としての道徳を家族に要求するケイトに対して、そんなケイトも思いを寄せている人物がいると告発する。マイケルに駒を与えたケイトに対して、母親のクリスはマイケルを甘やかしているのではないかと指摘するが、ローズはそこに横やりを入れ、ケイトが駒を買ったのはモーガンズ・アーケイド店主のオースティン・モーガンに会うためだったと言い出す。ローズは、ケイトはモーガンが好きで図星を刺されたケイトは赤面していると囁き立てる。この後モーガンは若い娘と結婚し、教師を失職したケイトはモーガンの子供の家庭教師となる。なんともほろ苦い結末である。

一方、クリスはマイケルの父親、ゲリー・エヴァンズが時たまひょっこり現れ、間もなく立ち去るたびにひどく塞ぎ込む。ケイトはマギーに言う―「去年の冬を憶えている。夜中にめそめそ泣いて悲しみ続けていた。あんなことは二度とごめんだわ」(DL 35)。クリスの秘められた思いも相当強い。おどけ者で愛煙家の次女マギーはワイルド・ウッドバインの煙を吐きながら、「ワイルド・ウッドバインは素晴らしい。素敵でワイルドな男の次ぐらいかしらね」(DL 23)とうそぶくが、彼女にも青春のほろ苦い思い出がないわけではなかった。それはマギーのかつての親友で美人のバーニー・オドネルがスウェーデン人の夫との間にもうけた双子姉妹を連れてロンドンから帰省したところに街でケイトが出会ったという逸話から話は始まる。かつての美人バーニーはマギーと同じく 38 歳のはずだが、映画スターのように着飾り 18 歳ぐらいにしか見えなかったとケイトは言う。かつての親友と自分の運命の違いにしばらく思いを馳せていたマギーは、やがて 16 歳の時のルナサの思い出を語り出す。その時マギーは好きでもないティム・カーリンに付き纏われていたが、本当に好きなのはハンサムなブライアン・マクギネスだった。しかしブライアンが夢中なのは美人のバーニーだった。4 人は男性陣の運転する自転車に相乗りし、15 マイル (24 キロ) 離れたアードストローヘダンスに出かけた。最後にミリタリー・ツー・ステップ・ダンスのコンテストがあり、決勝は 3 組に絞られた。地元コンビとティムとマギー、それにバーニーとブライアンの 3 組だった。バーニーとブライアンは美男美女の組み合わせであるばかりでなく、そのダンスも華麗極まりないものだったので、誰の目にも彼らの優勝は明らかだった。しかし深酒で審査員が酩酊していたのか依怙臆かで、優勝は地元コンビ、マギーたちが 2 位、バーニーたちは 3 位という不可解なものだった。憤慨したバーニーはその晩一切口をきかず、自転車に乗ることも拒否した。そしてそれを最後にブライアンはオーストラリアへ移民した。恐らくこれはマギーがおどけた言動の陰に隠した最初で最後のロマンスの瞬間であったろう。

このように姉妹にはそれぞれに胸に秘めた思いを持っている。普段はおどけてそんなそぶりは一切見せないマギーのこの告白は、姉妹の抱いている思いに一層深く共鳴したろう。それはその直後の場面の急展開で明らかとなる。マギーの意外な告白に一同に気まずい沈黙が訪れる。この雰囲気を変えるためか、ケイトはクリスにラジオは大丈夫と声をかける。クリスがラジオのスイッチを入れると、そこから激しいアイルランドのダンス曲「メイソンズ・エプロン」が鳴り始める。するとそれまで呆然と外を見ていたマギーが急に振り返り、顔を激しく揺すり踊り出す。その表情は挑みかかるようなしかめ面だ。次にマギーは小麦粉で顔を真っ白に塗りたくり、マスクのような顔で「ヤーッ!」と激しく叫び踊り狂う。次にローズが顔を輝かせ踊りに加わり、長靴で調子はずれにリズムを取る。次にアグネスがそれに加わる。彼女の踊りは一番優美で官能的だ。クリスはジャックの法衣を畳んでいたが、それを投げ上げて被り踊り出す。そのクリスを諷めたケイトも次第に変容していく。

姉妹は輪をなして何度も旋回する。しかしその動きは戯画化されたもののようであり、その音はあまりにもうるさく、その鼓動はあまりにも速い。そしてほとんど辛うじて踊りと言える動きは



グロテスクなものになる。なぜなら例えば腕を繋ぐところが、姉妹は腕を互いに首や腰のまわりにきつく回しているからだ。ケイトはその光景を不快そうに、警戒するように眺めていたが、ついにはいきなり立ち上がり、頭を後ろに投げ出して、「ヤーッ!」と大声を発する。

ケイトは一人で、完全に集中し、完全に私的に踊る。それは制御されていると同時に狂乱的でもある。(DL 22-23)

あれほどルナサの踊りに反対し、踊る地元民を見下していたはずのケイトまでが踊り出す。マギーの告白が直接のきっかけになって、ケイトが意識のうえでは押さえつけていた衝動が爆発したものとえよう。それは教師としての体面、英雄的宣教師ジャックの妹であり、私生児を生んだクリスの姉であるという一家の微妙な立ち位置が押さえつけてきたものからの解放である。F・C・マクグラスはこの踊りをニーチェが『悲劇の誕生』で述べるアポロ的なものとディオニュソス的なものの概念を借りて、優れてディオニュソス的なものと論じている。<sup>7</sup> ディオニュソスは踊りと音楽と酒の神であり、その信者、バックス教徒は主に女性で、エウリピデスの『バックスの信女たち』のように集団をなして野山で踊り狂い、捉えた獲物を生のままで喰らう。いわば古代ギリシアで抑圧された地位にあった女性たちの集団ヒステリーと言える面もある。ニーチェはこの概念を理性的で明晰で、抑制と均衡の取れたアポロ的なものと対置する。それは次のようなものだ。

……芸術家はディオニュソス的な酩酊と神秘的な自己放棄との中であって、熱狂する合唱隊（コーラス）からひとり離れたところにひれ伏し、アポロ的な夢の作用によって、彼自身の状態、すなわち彼が世界の奥深い根底と合一した状態が、比喩的な夢像の中に啓示される様子である。<sup>8</sup>

そして詩人は主観と客観、個体化を超越する。まさしく踊りはマギーを発信地として次第に伝染している。しかしながら姉妹の踊りはそれぞれに踊り手の個性を反映してもいる。それはケイトの描写に端的に述べられているように「それは制御されていると同時に狂乱的でもある」。それは各人の個性が刻印された生命の律動である。しかしラジオは突然切れてしまい、踊りは急に中断する。

## VI. アイリッシュ・ダンス、ジャズ・ダンス、アフリカン・ダンス—生命肯定のリズム

そこに登場するのが13か月ぶりにあらわれたマイケルの父親、ゲリー・エヴァンズである。彼は前回マンディ家を訪れた正確な時期すら覚えていない。クリスにこの半年間どうだったと訊いて、彼女からこの前に来たのは13か月前だと窺われる。彼は行商だが、何を扱っても長続きせず、すぐに取り扱う商品を変える。今回は蓄音機を訪問販売している。クリスには売れていると虚勢を張るが、実際は売れている気配はない。彼は無責任な人間で何をしてもうまくいかない。その点は『モリー・スウィーニー』(Molly Sweeney)に登場する、モリーの夫フランクと似ていないこともないが、結果はどうあれ、少なくともフランクの動機が彼の意識では善意に発しているのに対して、ゲリーにはそ

ういう気配すらない。彼は蓄音機販売の前はダブリンでダンスの教師をしていた。蓄音機はラジオとともに1930年代のジャズ・エイジでは音楽メディアの花形であった。それにダンス教師。マクグラスはゲリーをこの劇で最もディオニュソスの人物であると指摘している。<sup>9</sup> 彼はニーチェが指摘するような存在の根底を揺り動かすような深遠な力を持っていない、トリックスター的なディオニュソスといえるかもしれない。

そんなゲリーは特にケイトにとって忌まわしい存在である。なぜなら私生児マイケルの誕生という一家の恥辱の責任は彼にあるからだ。ケイトは珍しく汚い言葉でゲリーのことを毒づく。するとそこにラジオからジャズ・ソングの「ダンシング・イン・ザ・ダーク」が流れてくる。するとゲリーはクリスの手を取って踊り出す。さすがにダンス教師をやっていただけあって、その踊りは見事である。マギーは織物をやっているアグネスに窓の外を見るように促すが、アグネスはマギーが驚くような激しい口調で私が忙しいのが分からないかと吐き捨てて見ようとしな。どうやらアグネスはゲリーに密かな好意を持っていて、踊る二人に嫉妬しているようだ。

ゲリーに毒づいていたケイトも、二人が踊る姿を見るうちに知らず知らずに心が動いていく。

ケイト：あれがあのエヴァンズの奴ができる唯一のことだったんだね。ダンスが。（間）クリスを見てごらんよ、あのおバカさんを。（間）お願いだから、あのおバカ娘を見てごらんなさいよ。（間）クリスは幸せだと顔全体が変わるのね。（間）二人は一緒にあんなに上手に踊っている。二人があんな美しいカップルになるなんて。（間）クリスったら、いつかのバーニー・オドンネルと同じぐらい美人じゃない。（DL 33）

そして踊りながらゲリーはクリスに結婚してくれと迫る。しかしクリスはどうせゲリーはまた出ていくだろう、それがあなたの性分だと取り合わない。しかし小路のところまで踊ってくれとせがむ。クリスは愛する人と踊るというディオニュソスの魔力で変容し、批判的なケイトも納得させるほどにその存在を輝かせる。

彼らが踊るのはジャズ・ダンスである。周知のようにジャズはアメリカに奴隷として連れてこられたアフリカ人の音楽が、アメリカで白人の音楽と融合したもののだが、この劇にはアフリカの踊りを踊る人物が登場する。それは劇の始まる3週間ほど前に25年ぶりにアフリカから帰国した長兄のジャックだ。語り手のマイケルがケイトの祈祷書から滑り落ちた、30歳代半ばの颯爽としたジャックの写真を目にしたことはすでに述べた。しかし帰宅したジャックにはその面影は微塵もなかった。それは53歳にしてマラリアで弱り果てた男の姿だった。しかもジャックは英語すら忘れかけていた。切れ切れに話すことはウガンダのリャンガの村で召使をしていた少年、オカワや豊穡の女神オビなどのことばかりだ。ジャックはケイトとマギーに豊穡の儀式を説明する。

それは川岸での鳥か山羊か仔牛を儀式的に生贄にすることから大変形式通り、大変厳かに始ま

る。それから最初のヤムイモとカサヴァイモを儀式的に割り、香油を塗る。そして大きな木のボウルにそれらを入れて人々の間で回す。それから感謝を表す祈祷だ。実際のところ朗誦のようなものだ。それは儀式的ダンスのリズム、ないしは太鼓の代わりになる。それから感謝の儀式が終わるとダンスが続く。面白いところは、その儀式は自然と世俗のお祝いになるんじゃない。ほとんど誰にも分らないうちに宗教儀式が終わって、地域のお祝いになっていくのじゃ。儀式のその部分は本当に見ものだ。円のまわりに火をつけて、色とりどりの粉を顔に塗って、地元の歌を歌い、椰子酒を飲む。そして踊り、踊り、踊り続ける。子供も男も、女も。その多くはらい病患者で、手足が変形したものや、そのうちの何本かがないものもたくさんいる。そして信じてもらえるか分からないが、何日も何日も踊るんだ。こんな素晴らしい光景はまたとない。（笑う）あの椰子酒！それを角で作った杯で施すんだ。時間の感覚は完全になくなる……。 (DL 47-8)

ジャックがアフリカの土俗宗教に完全に染まっているのがその口調からわかる。しかしこの儀式をよく見ると、焚火、音楽、踊り、飲酒と異教のルナサの儀式と非常に近い。現代のルナサからは生贄の儀式はなくなったようだが、姉妹のあいだで話題になった裏山のルナサの踊りで焚火に倒れ込み、瀕死の大やけどを負ったスウィーニーの息子は一種の生贄の代用とも言える。また宗教儀式と世俗の祝祭の境がないという点は、ラジオから流れてくる音楽に合わせて自然発生的に踊られた姉妹の踊りと極めて近い。なによりも両者は収穫への感謝であるとともに、不具のらい病患者の嬉々とした踊りに見られるように、生きてある者の生命の肯定である。そしてこれは当時のカトリック教会に決定的に欠けているものだった。

リャンガのこの思想は収穫の儀式だけに留まらず、生活全般に浸透している。マイケルが私生児だと知ると、ジャックはリャンガでは私生児は歓迎される、女はみな私生児を欲しがると、なぜなら子供が多いほうが幸せであると考えられているからと話す (DL 41)。それだけではない。リャンガは一夫多妻制である。マギーが冗談交じりにリャンガへ行けば姉妹ひとりひとりに夫を保証してくれるとジャックに問うと、彼はそれは無理だが、4人全員に一人の夫を見つけることはできるという。そして第一夫人が一番大きな小屋に住み、他の妻たちは同じ囲いの中で共同生活をし、家事、子育て、農作業を分担するという。マギーは「それは私たちがどうにかやっていることじゃない」 (DL 63) と答える。ジャックは続けてこう言う。

ジャック：お前たち4人全員でな！そしてこのシステムのいいところは、夫と妻たち、子供たちが小さな共同体を作って、全員が全員を助け、世話をするというところじゃ。わしは断然それがいいと思うな。 (DL 63)

ここで夫婦関係と兄弟姉妹の関係の違いを一旦置いて考えると、リャンガの一夫多妻制はマンディ家の生活形態と奇妙なまでに似てくる。ジャックを頂点として姉妹たちが仕事を分担し、私生児マイ

ケルを育てている。リャンガの一夫多妻制はキリスト教の倫理を外して考えれば、乏しい資源を有効に分配する互助システムであることが明らかとなる。それは限られた仕事しかないバリベッグのマンディ家も同じことだ。ただ集団を構成する原理が婚姻関係なのか、血縁関係なのかの違いだけである。

老いて衰えたジャックは代替わりの儀式を行う。継承者は7歳のマイケルには無理なので、その父親のゲリーとなる。ジャックはウガンダ時代に対立し、ジャックが異端であることを教会上層部に通告した地方長官から別れの記念にもらった、大きな羽根飾りのある前知事の儀式用の帽子と、ゲリーの麦わら帽子をリャンガの流儀で儀式的に交換する。これはリャンガ式の互助組織であるマンディ家の王位を公式に委譲したことを意味するだろう。しかし最後で明らかになるように、ゲリーはウェールズに妻子があり、クリスとは結婚できない。それにゲリーはスペインの反ファシスト勢力を支援するために志願し、間もなくスペインに渡った。ジャックは1年も経たぬうちに亡くなり、青年となったマイケルは家を出た。かくしてマンディ家を継承するものは誰もいなくなった。

## VII. 結論—崩壊と継承

しかし後継者がいたとしても、マンディ家の崩壊はすでに決定的になっていた。ゲリーとクリスがジャズ・ダンスをした場面の後で、ケイトはマギーに次のように話す。

ケイト：……お医者さんはジャック兄さんの精神が混乱しているとは思わないが、兄さんの上役たちは多分兄さんを帰国させるしかなかったんだろと言っているわ。どういう意味なんだかわからないけど。そして教区の神父さんが今日私に話したの。そしたら、生徒の数が減っているから、夏以後に私の仕事はないかもしれないというの。生徒の数なんか減っていないわ、マギー。どうしてあの神父さんは嘘を言うのかしら。どうして私を追い出そうとするの。そしてなぜあの神父さんはジャック兄さんに会いに来ないの。(DL 35-36)

そしてケイトは自分が死んだり、失職すればローズはどうなるのかと言って泣き出し、マギーは慰める。しかし後に語り手のマイケルが明らかとするように、ケイトの不安は現実のものとなり、ケイトは教師を失職する。そもそもジャックが帰国したのも、彼が現地の宗教、習俗に馴染み過ぎてカトリックの宣教師としては不適格と判断されたためであった。しかし追求の手はそれに留まらなかった。ジャックを兄に持つケイトも教師として不適格と見做され、生徒数減少という事実無根の理由で失職させられたのだ。主たる収入源を失って一家の財政は窮地に陥る。

それだけではない。アグネスとローズは手織りの手袋作りを内職としていたが、近々近所に機械織りの工場が建設されることになり、彼らの割高な手袋は無用となってしまった。しかもアグネスとローズは年齢や知恵遅れの問題で、その工場に就職するのは難しそうだ。そして9月になり、マイケルがまた学校に行く日の朝、台所の牛乳瓶にはアグネスの決然たる筆跡で次の書置きがあった—「金輪際戻りません。これがみんなのためです。探さないでください」(DL 60)。そしてアグネスとロー

ズの姿はどこにもなかった。これは内職を失った今、家族の重荷でしかないと考えた2人が口減らしのために自ら進んで家出したのだ。これは何よりも一家の中では一番若い、末娘のクリスとその息子マイケルのために他ならない。マイケルにはこのことが分かっていたので、25年後（ということは彼が32歳の時）、ロンドンで彼らを発見する。アグネスはすでに亡くなり、ローズは障害者施設で瀕死の状態でもなく亡くなった。彼女らは公衆トイレの清掃や工場で働いたが、ローズが働けなくなり、ついには路上生活者に身を落とした。先にスウィーニー少年を裏山のルナサの踊りの生贄の一種と言ったが、そういう意味では彼女たちは一家の生贄と言える。しかも自ら選択して。

残された一家はクリスが機械織りの工場に就職し身を粉にして支えた。その仕事が大嫌いであったにもかかわらず。遅ればせながら訪れた近代化が一因となって崩壊した家庭ではあるが、その近代化を利用しなければ生き残っていくことはできない。クリスもアグネスとローズの失踪は自分とマイケルを生かす為だということが分かっていたはずだ。失職後数年間何もしていなかったケイトは、先に述べたようにオースティン・モーガンの子供の家庭教師となった。かつては慕っていた男性の子供を教育するケイトの心情には複雑なものがあつたはずだ。一方、こういう計らいをしたオースティンもケイトに好意を持っていた可能性も考えられる。

ゲリーはスペインでの従軍中に脚を負傷し、踊ることはできなくなった。それでも年に1度程度はマンディ家を訪れ、そのたびにクリスに求婚した。しかし第2次世界大戦を期にそれも途絶え、1950年代半ばに突然ウェールズで出された手紙がマイケルに届く。それは彼の異母兄弟であるもう一人のマイケル・エヴァンズからのもので、父親ゲリーの死の知らせであつた。こうしてこの劇は語り手マイケルの最後の回想が終わるとともに、マンディ家の家族の喜びと悲しみを塗りこめた一幅のタペローは完結する。

しかし最後に指摘しなければならない点が1点ある。それは少年マイケルが作っていた風のことである。そこには何か恐ろしげな絵が描いてあり、ケイトがそれを見た時は「これは悪魔、幽霊」と怖がった振りをする。その時、風に何が描かれていたかは示されないが、最後の語りの直前でその風の絵が観客にも示される。それは「粗野で、冷酷な、せせら笑っている顔」(a crude, cruel, grinning face DL 70)である。これは明らかにアフリカの原住民の仮面や像に見られる顔である。とすると、ジャックがウガンダから持ち帰った、異教のルナサの踊りにも通底する生を肯定する思想は確実にマイケルに受け継がれたというフリールのメッセージがここにある。なによりもマイケルは伯母たち、伯父、母親、父親の言動、息使い、胸に秘めた悲喜こもごもの思いまでを記憶している。彼が記憶している限り、それらは存在することをやめない。すでに述べたように、この作品の舞台となった1936年の翌年にアイルランド新憲法が制定され、政治、カトリック教会を代表とする宗教などの方面から個人の生を抑圧する圧力は高まった。しかしどんな手段を使っても人間の生きようとする欲求は完全に封殺することはできない。フリールは敢えて自伝的要素を盛り込むことで、この構図の原点を描き切った。それは伯母たちや母親への鎮魂歌であり墓碑銘である。



## 註

1. Scott Boltwood, *The Plays of Brian Friel* (London: Palgrave, 2018), p. 111.
2. Anthony Roche, *Brian Friel: Theatre and Politics* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), p. 170.
3. *Ibid.*, p. 169.
4. Christopher Murray, ‘“Recording Tremors”: Friel’s *Dancing at Lunaghsa* and the Use of Tradition’ in (ed.) William Kerwin, *Brian Friel: A Casebook* (Oxford & New York: Routledge, 2014), pp. 29–30.
5. R. F. Foster, *Modern Ireland 1600–1972* (London: Penguin Books, 1989), pp. 543–4.
6. Brian Friel, *Dancing at Lunasa* (London: Faber&Faber, 1990), p. 1. (以下、DLと略し、本文中にページ数を記す)。
7. F. C. McGrath, *Brian Friel’s (Post)Colonial Drama: Language, Illusion, and Politics* (New York: Syracuse University Press, 1999), pp. 234–247.
8. フリードリッヒ・ニーチェ（西尾幹二訳）『悲劇の誕生』『世界の名著 46 ニーチェ』（中央公論社、1966）461 頁。
9. McGrath, *Ibid.*, p. 241.

## Abstract

### An Essay on *Dancing at Lughnasa* by Brian Friel: Symbiosis, Collapse and Inheritance

Kazuo OIKAWA

*Dancing at Lughnasa* is Brian Friel's best-known and most popular play. Moreover, it is the most autobiographical work of his plays: the five Mundy sisters in this play are modelled on his aunts and mother. However, some details are fictitious: for example, Michael in this play is an illegitimate child whereas Friel is not. Some fictitious elements are introduced into this work to reinforce its dramatic effects.

In its dramatic form, this work is a memory play just as Tennessee Williams' *The Glass Menagerie* is. Grown-up Michael narrates the story while seven-year Michael is on the stage. This choice of the form is deliberate. This play is intended to be a tableau in Michael's memory.

This work is set in Ballybeg, a small village in Donegal, Ireland in the beginning of August, 1936, some fifteen years later from the establishment of Irish Free State. This setting is crucially important because the Public Dancehalls Act was enacted in the previous year and the Irish New Constitution was to be introduced in the following year. These legal changes show the catholic influences were growing stronger at that time.

This play begins with two arrivals. One is the return of Father Jack, the eldest brother, from Uganda, Africa after 25 years. He was a hero of the region as a missionary to a leper hospice in Uganda. The other is a Marconi radio from which Irish traditional music and posh Jazz songs sound. Everyone in the Mundy family is crazy about it. The time is the beginning of August, Lughnasa weeks. Lugh is a Celtic god of light symbolizing harvest. In a Lughnasa festival people dance beside a bonfire, celebrating harvest. In this play the radio which sounds receiving electric waves is compared to Lugh.

Kate, a schoolteacher and the eldest sister, comes home after shopping in the Ballybeg centre. She reports all the people were talking about Lughnasa dance in Ballybeg and Agnes, the third sister, proposes that all of them should go to it as they used to. But Kate rejects her proposal, saying it is not proper for a Christian family like them to participate in such a pagan festival as Lughnasa dance. Kate sometimes shows an excessively strong moral sense because their family's reputation is on a very delicate balance with the missionary hero, Jack, and the schoolteacher, Kate, on the positive side and the illegitimate child and his mother, Michael and Chris, on the negative one. As this episode indicates, every Mundy sister has distinct characteristics. Kate is a strict teacher and a quasi-patriarch of the family. Maggie, the second sister, keeps the household and acts as a joker of the family. Agnes is very calm on the surface but has a strong passion inside. Rose, the fourth, is 'simple' and very straightforward in her speech and action. Agnes and Rose earn a little money by knitting gloves. Chris, the youngest, has a son, Michael, out of wedlock with a travelling Welsh salesman, Gerry Evans. Michael is making kites

possibly because he unconsciously wants to indicate his presence to his unknown father with his kites.

All the Mundy sisters are unmarried but have a strong longing for marriage. Kate secretly loves Austin Morgan, the owner of Morgan's Arcade. Maggie still misses Brian McGuinness, who left for Australia after they went to Lughnasa dance with other friends when she was sixteen. Agnes has a secret interest in Gerry, a lover of Chris and father of Michael. Rose occasionally meets Danny Bradley, who has a wife and children and whom the other sisters criticize. Chris always falls into a serious depression when Gerry leaves her after his sporadic visits.

Agnes' proposal is turned down by Kate, but when the radio plays a rhythmic traditional tune, 'Mason's Apron', Maggie breaks into dancing violently. Surprised by Maggie, Agnes, Rose, and Chris follow Maggie. At first Kate remonstrates them but finally joins in their dancing. Their violent dancing tells us their strong sexual frustration as well as a Dionysiac affirmation of life in a Nietzschean sense, which other dances in this play share. For example, Chris dances with Gerry to a jazz song played on the radio. Seeing their dance, Kate, who is always criticizing Gerry, unknowingly admires them and points out Chris is as beautiful as a renowned beauty, Bernie.

The other Dionysiac dance is Ryangan festival one which Jack tells his sisters. Ryangan people, most of whom are lepers, keep on dancing for days, drinking palm wine and celebrating the harvest and their own existences. Jack also tells them about the polygamic lifestyle in Ryanga, which has curiously many affinities with the life of the Mundy family if the marital principle of the former is replaced with the familial one of the latter. Jack is so much influenced by their religion and customs that he has lost his Christian orthodoxy. That was the reason why he was sent back home. Moreover, the parish priest goes so far as to fire Kate by telling a lie that the number of the students is falling. Later soon another financial damage follows. Agnes and Rose lose their knitting jobs because a machine knitting factory is about to open in Ballybeg. Desperate at the news, they secretly leave home one morning for good in the hope that the weakest of the family, Chris and Michael will survive.

Jack exchanges his ceremony hat with a big plumage with Gerry's straw hat in a very formal Ryangan custom. possibly because Jack wants to show his position as the top of the family has been symbolically inherited to Gerry. However, Gerry leaves and joins in the International Brigade to fight the fascists in Spain. The symbiotic principle common to Ryanga and the Mundy family seems to have lost its inheritor but at the last moment the paintings Michael has painted on the kites are shown: they are obviously grotesque African faces. This final episode shows its true inheritor is Michael.